

連載 “Well-being”ことはじめ 第76回 1on1 からズームアップする

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ
三村 和子

NHK 大河ドラマ「光る君へ」が放送中です。源氏物語という小説がどのように創られていくのかストーリー展開も楽しみですが、ドラマで平安貴族が着用している装束がとても色鮮やかで美しく、毎回注目しています。平安装束をまとった姿はゆったりとしていて、自然や季節の風景に溶け込む様子に風土を感じることができます。

平安装束もそうですが日本の着物文化では洋服と異なり、身体のシルエットがあまり強調されてきませんでした。着物は全体的に平らに見えるように着用し、洋服が身体のシルエットを強調する点とは対照的です。洋服は体型を含めて自己表現の手段となってきました。着物は四季折々の美しい自然や風景を表す柄が豊富にあり、自己ではなく全体との調和に意識が向きやすいと考えられます。衣服は単に身に着けるものではなく、心のもちようやものごとの捉え方にも影響を与えてきたと考えられます。

ベルク氏が「俳句における言葉の露点と景色」で述べているように、「初景色」（夫佐恵）という俳句が表現する日本語の典型は「景色への通路と他者（朗読者）への通路」です。

初景色

初景色
富士を大きく
母の里

ベルク氏は「そこには、動詞も、文法的な主語も、発話者を明確に示したものもない」、それでも隠された主語である「私」、壮大な富士山の魅力、そして「富士山からそう遠くない私の母の里の村でお正月を過ごすために帰省した」という意味がはっきりと示されると指摘しています。このことを「詩はいかなる主語も表さず、二つの通路を作り上げる。形式への通路と他者（朗読者）への通路である。」とベルク氏は述べています。つまり、主語が明示されないことにより、富士山の美しい景色は、俳句中の人物である眺める「私」だけでなく、俳句の読み手にも広がっているという意味合いです。初景色を「私」と一緒に味わうことを楽しみ、共感しているという幸せが広がり、読み手自身が初景色に溶け込んでいくようなふわとした優しい空気に包まれた感じの心地よさを味わうことができます。これは日本文化の持つ美しさの1つと言えるでしょう。

4月に入り、様々な組織で入社や異動など、新しい環境で働き始める、あるいはこのような人を迎えるなど、新しい出会いを経験している人が多くおられると思います。仕事の内

容を覚えるという実務的なことがらに加えて、新しい環境に慣れるということについて希望と同時に不安を感じる人がいると思います。「雰囲気慣れる」とか「周りに溶け込む」とかいった適応は、日本の組織独特のものだと思います。

1990年代に日本の多くの組織において成果主義が導入され、自律した働き方が求められています。「早く結果を出す」「効率重視」の傾向は益々強くなってきていると感じています。そこで、人間関係を下支えするものとして職場の一体感が重要です。高い目標に向かって、一緒に歩もうとするにはフェアな関係が一体感の醸成に役立つと考えます。

上司が部下と直接コミュニケーションを行う 1on1 ミーティングにおいては、仕事上の報連相について「役割に応じた応答」の場面だけでなく、なんでも話し合える「傾聴・共感」の場面を設定することが求められます。場面の切り替えが鍵になりますが、スムーズに行うツールとしてパターンランゲージが有効と考えます。

部下の立場では、評価者である上司に言いたいことが言えない、あるいは余計なことを言うよりもその場は黙っていようといった姿勢を持ってしまうことが懸念されます。心理的不適応を抱えている人は、「下である」ことを「負け」と捉えて余計に寡黙となってしまうことが多いと言われています。

そのため、部下が前向きに対話できるよう、まず同じ土俵にいる仲間であるというイメージを伝えた上で「組織の一員として一緒に頑張ろう」という道筋を示すことが大切です。上司と部下というスコープからズームを広げて、組織の一員であるといった広い視野を持つことができます。対話を通して、上司と部下に納得感や満足など心地よさを感じる生命情報喚起されることが期待できます。このようなポジティブなエネルギーがゆとりや前向きさにもつながると考えます。

以下に、ISプロジェクトにおけるパターン「理想を実現する」を掲げます。

[メインパターン]

理想を実現する

[概要説明]

理想を実現するために、思いや考えをことばにして伝えて考え抜くことで、プロジェクトに前向きに取り組む

[状況]

- ・プロジェクトを開始するとき
- ・プロジェクトで向いている方向が合っていないと感じるとき

[問題] 重要なことがらについて話し合わないままプロジェクトを進行させて、パフォーマンスややりがい感に支障がでてしまう。

[問題の解決を困難にしている原因]

- ・プロジェクトで実現できると考えるスコープが狭い。
- ・人それぞれの経験や価値観により、物事への観点の持ち方や理解の仕方が異なる。
- ・言語技術教育が十分でなく、ISプロジェクトに見合ったレベルにない。

[解決(のコツ)] 対話することからマネジメント/エンジニアリングプロセスのPDCAを積極的に回すことにより、前向きに挑戦するチームを創り上げる。

- ・対話しながら見ているスコープが、他の人と合っているかどうか確認・調整できる。
- ・どんな困難があっても粘り強く取り組み、「こうすればできる」という自信と前向きな気持ちができる。
- ・メンバーと共感し合うことができ、互いに支え信頼し合える関係ができる。

理想という抽象的なことがらについて、上司・部下それぞれにとっての理想や実現への思いを語り合うと、「こんな風に思っていたのか」とか「そういう見方があるのか」など、普段の仕事上のやりとりではわからなかったそれぞれの価値観を知ることができると思います。そして、お互いを尊重し、理解を深めることが、人と人との関係性において貴重な価値を生みます。プロジェクトにおいて折々のタイミングでこのパターンを使った対話を続けることにより、理想の実現への道筋が広がるのではないのでしょうか。

IS 技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<参考・引用>

*1) Augustin Berque “Point de parole et paysage dans le haiku”, Revue des sciences humaines, No.282, Feb. 2006, 29-40 (オーギュスタン・ベルク「俳句における言葉の露点と景色」)

<https://www.issj.net/mm/mm16/11/mm1611-ab-ab.pdf>